京都大学	博士（社会健康医学）	氏　名	髙　士　直　己
論文題目	Association of patient quality of life with the degree of agreement in the perceptions of patient disability within the stroke patient-rehabilitation therapist dyad: a cross-sectional study in postdischarge rehabilitation setting. （脳卒中患者とリハビリテーション療法士の間における患者の障害に関する認識の一致の程度と患者の生活の質との関連：退院後のリハビリテーションにおける横断的研究）		

（論文内容の要旨）

【背景】

立場や考え方の相違から生じる医療提供者と患者の間のミスコミュニケーションは、長い間、患者中心の医療における課題の一つとされてきた。リハビリテーションの領域においても同様であり、特に脳卒中後のリハビリテーションでは、障害に関する認識や治療の目標について、患者と療法士の間で食い違いが存在し、それがリハビリテーションプロセスを阻害することが指摘されてきた。しかし、これまでの知見の多くは入院患者を対象としたものであり、退院後のリハビリテーションサービスをセッティングとして、患者ー療法士間の認識の一致の定量的評価や患者アウトカムとの関連を検討した研究はほとんど存在しない。そこで、退院後のリハビリテーションにおける患者ー療法士間の障害に関する認識の一致の程度と患者の身体的・心理的 Quality of Life（QOL）との関連を探索することを目的に本研究を実施した。

【方法】

本研究は、介護保険のリハビリテーションサービスを利用している在宅の男性脳卒中患者と、リハビリテーションを担当する療法士（理学療法士または作業療法士）のペアを対象とした横断的研究である（実施期間は2019年3月～2020年2月）。研究協力が得られた通所または訪問リハビリサービスを実施している施設 17 か所から対象ペアを簡易的に選定し、タブレット内に電子化された構造化質問票を使用してデータ収集を行った。患者の身体的・心理的 QOL は日本語版 WHOQOL-BREF を、患者と療法士の持つ患者の障害の程度に関する認識は 12-item WHO Disability Assessment Schedule 2.0 (DAS) を用いて測定した。患者と療法士から得られた DAS スコアをそれぞれ 2 区分（低・高）と 3 区分（低・中・高）に分け、その組み合わせで、認識の一致の程度を表す多区分変数（6 区分 [DAS 患者スコア低・療法士スコア低、低中、低高、高高、　　高中、高低]）を作成した。また、患者と療法士の特性として、患者の年齢や脳卒中発症後の年数、発症回数、併存疾患の有無、療法士の年齢と職種、さらに患者を担当している期間などを測定した。統計解析では、一般化推定方程式を用いて共変量とクラスター効果を調整した上で、認識の一致の程度を表す多区分変数と患者の身体的・心理的 QOL スコアの関連を評価した。共変量は、患者と療法士の特性のうち、患者の身体的・心理的 QOL スコアとの単変量解析で $P<0.2$ となったものを選んだ。

【結果】

81 ペア（患者 81 名、療法士 45 名）の参加が得られた。患者の平均年齢は 72.6 で、74.1%が初回発症であり、90%以上で発症から一年以上が経過していた。療法士の平均年齢は 32.7 であり、60%が理学療法士で、約 90%が患者を担当して 3 年未満であった。障害の程度について、48 ペア（約 60%）で認識の不一致が確認された。一般化推定方程式の結果、身体的 QOL を従属変数とするモデルにおいて、DAS 低低、低中、低高の回帰係数はそれぞれ、0、-7.9、-16.0 であり、DAS 高高、高中、高低の回帰係数はそれぞれ、-18.5、-22.4、-19.6 であった。一方、心理的 QOL を従属変数とするモデルでは、DAS 低低、低中、低高の回帰係数はそれぞれ、0、-12.4、-10.6 であり、DAS 高高、高中、高低の回帰係数はそれぞれ、-18.0、-23.5、-20.8 であった。

【結論】

参加したペアの約 60%で患者の障害についての認識に乖離が見られた。さらに、患者の DAS スコアが低い場合（自身の障害を軽度であると認識している場合）、認識の不一致が大きいほど、身体的・心理的 QOL が低かった。自宅生活を送る脳卒中患者の身体的・心理的 QOL を考える上で、患者の障害に関する患者 - 療法士間の認識の乖離は留意すべき要因の一つと考えられる。

（論文審査の結果の要旨）

本研究は、男性脳卒中患者と療法士の間の「障害の程度に関する認識の一致度」と患者の身体的・心理的 QOL との関連の探索を目的として実施された横断研究である。神奈川県にて介護保険によるリハビリテーションを提供する施設 17 ヶ所を利用する男性患者と患者を担当する理学／作業療法士のペア 81 組（患者 81 名、療法士 45 名）を対象とし、タブレット端末上の構造化質問票を用いてデータ収集を行った。統計解析は、患者の身体的・心理的 QOL を目的変数、“患者による障害度評価”と“療法士による障害度評価”の一致度を表す多区分変数を説明変数、患者の年齢、高血圧・心疾患の有無を共変量とし、担当療法士によるクラスター効果を調整するために一般化推定方程式を用いた。

分析から、患者の身体的・心理的 QOL は、患者自身の障害度評価が「軽い」場合、療法士の評価との乖離が大きいほど低く、患者自身の障害度評価が「重い」場合、療法士の評価との乖離の程度に関わらず低いことが示された。障害の程度に関する情報に関して、①患者-療法士間での共有が必要なこと、②共有する際に配慮が必要であること、③適切な共有によって患者の QOL を高められる可能性のあることが示唆された。

以上、本研究の結果は、障害度に関する患者-療法士間の情報共有の必要性とその臨床的意義を示唆するものであり、介護保険下で提供されるリハビリテーションの質の向上に寄与するところが多い。

したがって、本論文は博士（　社会健康医学　）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、令和　3　年　10　月　29　日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日　以降